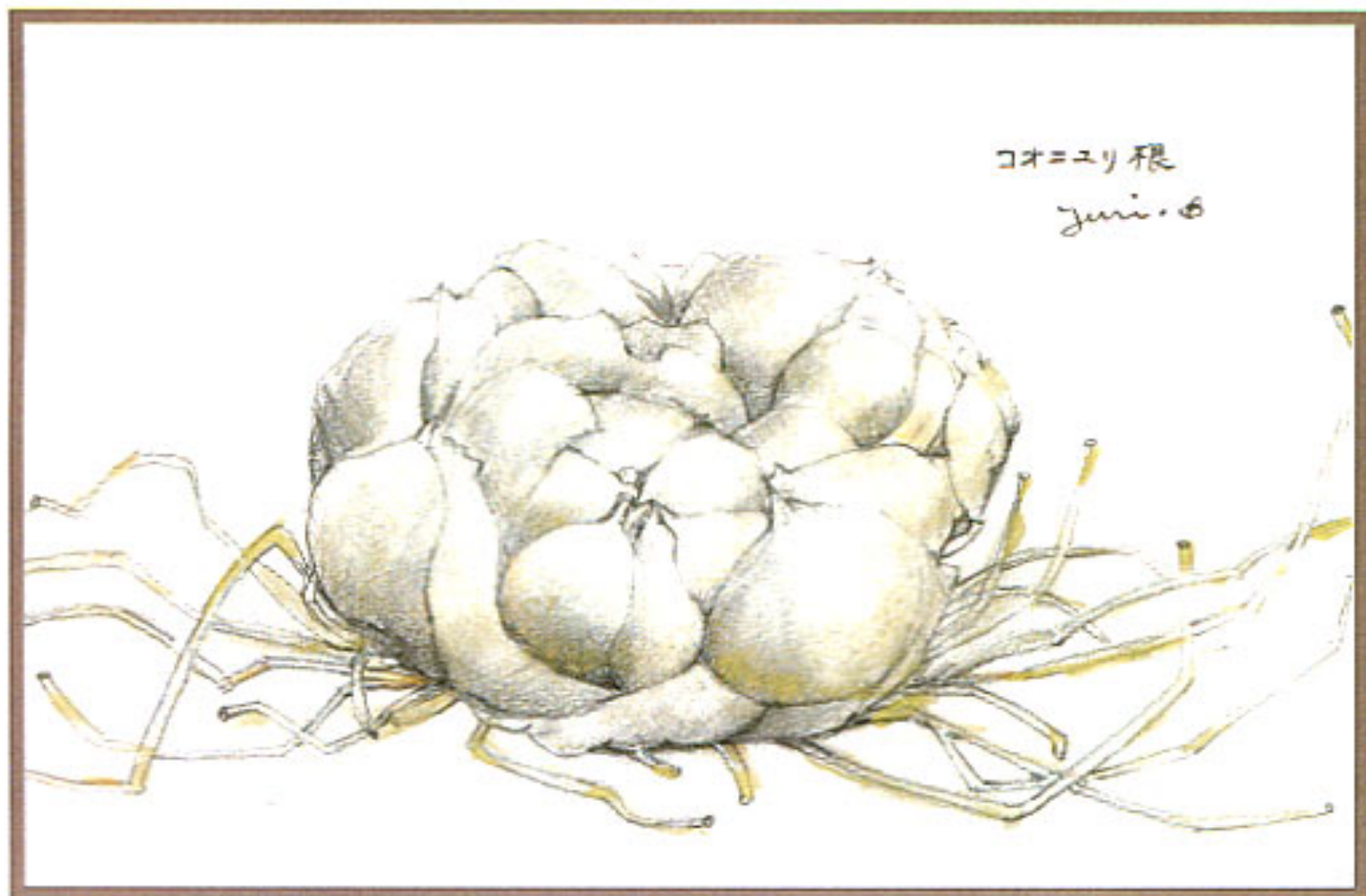


かたね
ふ



「かきねし」創刊を祝す。

伊藤敬子

「世」同人 佐藤喜仙氏の手による、このたびは
句誌「かきねし」を創刊されるという。

俳句という詩に生命を捧げる、という執意と
意志に拍手を送りたいと思う。

俳壇に新風を送り、活気を送り込みたいと
いう意気込みを評価したいと思う。

平成二十三年 夏

創刊の言葉

佐藤喜仙

人間の大きな欲求の一つに【自己表現】があると思う。しかし男性の多くは仕事を持っている間は、自己を主張することとは困難というか、ほとんど不可能なことである。それが許されるのはごく一部の恵まれた人に与えられた特権である。女性はどうなのか。家庭を守り子育てをするということは、やはり自己を犠牲にしないと出来ることではない。ようやく子育てから解放された時には五十歳前後の中年になっている。

自分の時間を持ったとき趣味として俳句を選ぶ人が多い。確かに俳句には知的生活を長く続けていく要素がある。英文学者でお茶の水女子大学の名誉教授の外山滋比古氏は「ある程度の年齢に達した人にとって、俳句ほど良い趣味はないでしょう」と述べている。

俳句入門の一般的動機としては

①そんなに費用がかからなそうである。②句友という友達が出来る。③十七文字の短詩形文芸である。等々挙げられると

思うが③の十七文字に泣かされ、苦しみ、のた打ち回ることになるのであるが、それは後の祭り。

問題はそうやって俳句を始めた人々の発表の場がなかなか得られない、ということである。もちろん結社に入会すれば解決するのであるが、入会を勧誘しても多くの人は尻込みをされる。既に色のついた結社の中で闘いたくないのである。季語の煩雑さも起因しているのであろう。

そこで季語について多少の整理を試み、自分も含めて多くの定年俳人（基本的には人生の第一の仕事をやり返してから、俳句を始めた人）の皆さんの作品の自由な発表の場を設け、それに触発されて創作意欲の昂揚をはかっていきたいと考え、『定年俳句誌・かさね』を発行することとした。同じ土俵で競うのではなく、終生共に学ぶということを第一の目標といたしたい。同人と会員の区分けはしているが、多くの結社誌が同人主体で、会員はその支えのように感じられるが「かさね」には同人と会員の間に差はない。従って会費も同額であり、全員が「かさねの友」なのである。

最後となったが、素晴らしい表紙絵をご提供いただき、今泉由利氏“に深甚なる感謝の意を述べておきたい。

黒羽集

(一)

佐藤喜仙

秋めくや虚子・秋櫻子踏みし道

櫻並木樹下のベンチに秋の風

新涼や鳥居とならぶ大櫓

青北風や狛犬の背に苔むして



秋澄むや武蔵国府の礎石跡

よさこい踊彩つぎつぎと櫂道

身に入むや老木に大き洞のあり

秋風や辻に残れる高札場

秋蟬のこゑの染み入る馬場の址

千年の櫂の空の秋日かな

かきね集

白選句集



蓮の実

松本周二

敗荷の凭れあひたる平家池

蓮の実飛ぶ平家池源氏池

赤あかね八幡宮の段葛

岩陰の譲れぬ所石路の花

まず噛みて零余子一粒むかご飯

夢のことかも鎌倉の鴟日和

枯野

川井素山

閉山の枯野に長き線路あと

囲炉裏ばた鮎やくけむり葺の宿

冬日背に足湯でながむなまこ壁

流木やく磯の匂や冬の浜

蒼天の変る紅葉や天城越え

暁光に岩松映える冬の海



特別作品

港よこはま

松本周二

白神

客員 村上克哉

秋冷やオロシア人の大道芸

空高し棒差し上げて大道芸

京劇のひとつ棒芸ハマの秋

ビル街に船渠残して秋高し

ハロウインの港よこはま潮曇り

ハロウイン魔女の手指の美しさ

柿の実に赤き陽あたる朝かな

馬車道の並木公孫樹の末枯るる

ソプラノの童謡澄みて秋思かな

図書館の庭に赤き実山法師

白神の杣の知恵継ぎ水澄めり

釣瓶落としはや灯の点る連子窓

新蕎麦や歌舞伎継ぎ受く過疎の村

丈揃ふ北信五岳走り蕎麦

「かさね」とは八重撫子や翁の日

名園は和歌の庭てふ薄紅葉

木枯一号吹き北杜夫逝く

木枯やどくとするマンボウ常永久に

昼下がり窓へひと声焼芋屋

如来椅像美男に御座す小春かな

撫子集

主宰選



熟柿の耐へきれず落ち弾けをり

岡野安雅

風邪癒えて泣き虫の子笑ひけり

切干の風に煽られ甘み増し

椎の実を炒る香りして友の顔

空広し峠越えれば冬紅葉

庭隅に柊の花見つけたり

本郷宗祥

学園の山茶花垣に一花かな

緑おびひかりて揺るる花芒

蝻螂の這ひつくばひて命果つ

秋の暮人込みに捜す待ち合せ

椽の木の下は殻のみ秋の暮

田島昭久

山茶花の白無住家に咲きにけり

幼児は蝶と戯れ昼の秋

杜歩く所々に帰り花

立冬や混迷続く政治かな

霧時雨甲斐の山々神の山

小林美登里

落石のカラカラ響く秋の声

若き小町葎簀の中の菊人形

一人旅高原に佇ち星月夜

芋畑子供の背より高く伸び

突堤に釣竿並ぶ冬隣

小池清司

振り向けば来し方遙か冬銀河

佗助を一輪活けて濃茶かな

絵付け待つ干支人形や小春風

空咳をして二杯目の玉子酒

那須野集

主宰選



日は入りて墨の色増す枯野かな

米田文彦

金色の银杏黄葉や阿弥陀堂

丸山酔宵子

寄合の果てし町内冬に入る

見晴るかす枯野横切る月明かり

学園の祭りも果つる暮の秋

地震が来て冬瓜汁の具が踊る

紅葉の樹樹従へて華厳の滝

中秋の名月飛ぶよ雲の中

冬濤の荒れいよよ増す今朝の浜

烈風に散った紅葉の掃く日和

蕎麦刈りのただサクサクと鎌の音

青木英林

爽やかや輝く雲の下に居り

柳田皓一

軒先の朱にかはりたる吊るし柿

犬連れて小春日和のペット自慢

落葉踏み黙々と行く登山道

秋の空九十六歳の歌声や

落ち鮎の赤腹見せて川下る

爽やかや天気図と空較べをり

畑仕事終へた笑顔や秋の暮

落栗の毬集められまた寂びし

流れ藻の浜に残れる良夜かな

坂上じゅん

古稀の友月見舞台で神楽舞ふ

後藤克彦

逝きし人香煙に偲ぶ今朝の秋

紅葉散る庭の石仏頭を隠す

外国に子は住まひけり鳥雲に

就活に慌てる姪や秋深し

子供得て青空さやか小鳥来る

落葉搔邪魔する孫に風もまた

初しぐれ湖に波紋のすぐ消えし

肌寒し紅葉回廊ひとり旅

天高し滝壺白きうづをなし

辻 紅葉

煌々と月のめぐれる枯野かな

長島清志

のうぜんの残暑に伸びる蔓の先

義父の死に木犀の香の静もりぬ

山路来て荷の軽くなる滝の音

立冬や土瓶蒸の出る夕の膳

父母の墓洗ひて妻と酒を酌む

マンションの窓にシクラメン冬支度

白磁一壺秋草活けて眺めけり

千年に一度の津波冬寒し

公園に子供らの声空高し

吉田博行

底紅の一会の花や世間広し

松岡利秋

水面に顔出す亀や秋高し

十六夜は一合徳利空きしころ

サボテンの花涼しげに夏の朝

秋風や連絡船の出船かな

孫の手を握って寝かす秋の夜

野分迷走若き日の我のごと

吾一人枯野さまよふ夢の中

啄木鳥のドラムに玻璃の共鳴す